

影山輝國先生の思い出

東京大学大学院教育学研究科
博士課程 東京大学特任研究員

加藤靖子

影山先生との出会いは、今からちょうど三十年前の一九八八年の4月に遡ります。当時、私は大学3年生で、特に中国思想に興味があったわけではなく時間割上都合がよかったので履修しました。もうなくなってしまうのですが、日野キャンパスのプール脇の1号館の教室に入ってきた先生が開口一番、「私が来たからには皆さんをどこへ出しても恥ずかしくないように教育いたします」とおっしゃったのをよく覚えています。また、授業内容もかなり高度なものになりそうな印象であったと記憶しています。そのせいか、この科目（中国哲学演習）の履修登録者数は一桁でした。実際に、先生の授業はたいへん専門的で厳しいものでした。当時の実践には学生に向かって「女子に学問なんかムダ」や「君たちは三流どころか五流大学の学生

だ」などと言って、ろくに授業を行わない教員がいたので、影山先生のこの言葉にはびっくりした覚えがあります。しかし、後年この時の先生の言葉や授業の厳しさに感謝することになりました。

中国哲学演習はゼミ形式の授業で、王充の『論衡』を読むというものでした。先生の当時の研究テーマは漢代の災異思想だったのでこの教材をお選びになったのだと思います。災異思想というのは、天変地異を時の君主の失政に対する天の譴責の現れとみなすものです。この『論衡』は、陰陽五行説や災異思想を迷信として批判するという内容で、二千年も前に書かれたにも拘わらず、その合理的な批判に驚きました。先生の解説も面白かったので、卒論は『日本書紀』に取り入れられた災異思想をテーマにしました。

大変熱心に指導していただいたおかげで、研究の面白さを
知ることができました。また、漢文を学ぶには中国語も知
らないとダメということで、ゼミ生に別途中国語を教えて
くださいました。私は高校時代までは外国語が苦手だった
のですが、この時先生に語学の勉強の仕方を教えていただ
いたことで、苦手意識を克服することができました。

学問に厳しい一方で、それ以外では影山先生は非常にき
さくな先生でした。先生は新任だったので、3年生だった
私ともう一人の同級生が最初のゼミ生になります。当時は
現在と違って「オフィスアワー」などはなくいつでも自由
に研究室に先生方を訪ねることができたので、しょっちゅう
訪ねては卒論相談などをしていただきました。当時は今
よりも教員に余裕があり、また人数の少ないゼミだったの
で、研究室で中国茶をいただいたり、飲み连接到いて
いただいたりしました。今は、教員が忙しくなってしまう
ことも少なくないという経験をする学生さんが全国的に
少なくなっているようで残念に思います。

ところで、卒業年の一九九〇年はバブル期で就職は非常
な売り手市場でした。私は大学院へ進みたい気持ちもあり
ましたが、親の希望もあつて就職しました。その後も民間
企業で就業していましたが、影山先生が国際交流センター
長になって二年目の二〇〇四年に実践に呼んでいただき、

5年間契約職員として勤めました。職員として内部から女
子大学を見ることになったわけです。この時は一八歳人口
が減少してきており大学収容率も九割を超えていましたか
ら、伝統校である実践も学生募集に力を入れざるを得なく
なっていました。そうした状況を内部から見ると、「女子大
学」の存在意義や高等教育について研究してみたいと思い
始めました。それで、契約終了と同時に東京大学文学部社
会学専修課程に学士入学しました。その後、同大学院教
育学研究科に進学して今に至ります。大学再入学までかな
りのブランクがありました。実践で影山先生に教えてい
ただいた学問の仕方は、東大でも十分通用するものでした。
「どこへ出しても恥ずかしくない」ようになれたか否かは
わかりませんが、査読論文も数本出すことができ、影山先
生に厳しく指導していただいたことを本当に感謝しており
ます。

ご退職を迎えられて、母校に先生の姿がないのは寂しく
もありますが、先生のライフワークである『論語義疏』の
研究に注力できるのは先生にとつても喜ばしいことだと思
います。今後の影山先生の更なるご活躍と御健康を祈念い
たしますとともに、今後ともご指導の程よろしく願ひ申
し上げます。

(平成元年度 卒業生)



30年前の影山先生。中央が加藤。